

6 「日本晴」熟期の近畿中国四国地域基幹品種選定の取組状況

ねらいと成果

北陸の「コシヒカリ」、九州の「ヒノヒカリ」は地域の代表品種として、ブランド化している。しかし、兵庫県を含む近畿中国四国地域にはこのような代表品種と呼べるものが見あたらない。そこで、近畿中国四国農業研究センターが管内15府県に「管内関係府県で協力し合い、この地域の基幹品種として共通の奨励品種を選定して出荷量をまとめ、売れる品種に育てていく」という取組を呼びかけて、2003年度より地域基幹品種共同選定試験(以下共同選定)をスタートさせた。スタートに当たって、近畿中国四国地域に最も要望が多い10月上旬刈取り(「日本晴」熟期)の良食味品種を対象とすることとした。本県もこの試験を奨励品種決定調査に組み込んで調査を進めてきた。2006年度には有望品種として、「北陸200号」と「きぬむすめ(旧系統名西海232号)」を供試し、場内調査、現地調査を行った。

内 容

「北陸200号」は「日本晴」と比較して、出穂、成熟ともやや早く、玄米収量は劣る。玄米千粒重は大きく、やや大粒である。見かけの品質、品位等級はほぼ同等であった。食味は「ヒノヒカリ」と同程度の良食味系統である。

「きぬむすめ」は「日本晴」と比較して、出穂、成熟ともやや遅く、玄米千粒重は小さく、玄米収量

はやや劣る。また、耐倒伏性はまさっている。

見かけの品質はまさり、品位等級も安定して良い。食味は「ヒノヒカリ」と同程度の良食味品種である。

「北陸200号」、「きぬむすめ」とも、ごく短程で倒伏に強く、「日本晴」に比べて収量は劣るが、食味はまさり、「ヒノヒカリ」と同等の良食味系統(品種)として期待できる。

現地調査の聞き取りでは、「『きぬむすめ』の食味は『キヌヒカリ』と同等であった」、「両品種・系統とも、倒伏しにくく作りやすい」、「両品種・系統とも、『コシヒカリ』、『キヌヒカリ』と『ヒノヒカリ』の間の時期に収穫ができる作型をとれる」、「両品種・系統とも、収量・品質ともによい」など好意的な意見が多かった。

今後の方針

共同選定では、候補の品種・系統について、参加府県それぞれの評価を総合して、次年度現地調査への供試等を決定することになっているが、現時点では本年度の共通評価はまとまっていない。今後、本県では日本晴対象の有望品種として、兵庫県農作物改良協会の協力で、「北陸 200号」と「きぬむすめ」の試作を行う。さらに、全農との意見調整、実需者との連携をふまえて評価を進める。

松本 純一(農業技セ・作物・経営機械部)
(問い合わせ先: 電話0790-47-2410)

表 北陸200号ときぬむすめの農業技術センタ-における調査成績(2003年~2006年平均)

品種系統名	出穂期 (月・日)	成熟期 (月・日)	稈長 (cm)	穂長 (cm)	m ² 穂数 (本/m ²)	全重 (kg/a)	玄米 収量 (kg/a)	比較 比率 (%)	玄米 千粒 重(g)	生育中の障害					玄米 品質	品位 等級	食味 総合
										倒伏 程度	葉い もち	穂い もち	白葉 枯病	縞葉 枯病			
北陸200号	8 22	10.1	72	16.5	392	128	46.3	90	23.1	0.6	0.3	0.0	0.0	0.0	3.2	1中-2中	0.01
きぬむすめ	8 24	10.5	75	16.9	367	143	50.0	97	20.7	0.0	0.5	0.0	0.0	0.0	2.8	1中	-0.07
比 日本晴	8 23	10.3	74	18.8	381	140	51.5	100	22.5	0.5	0.1	0.0	0.0	0.0	3.2	1中-1下	-0.30

注1) 品質は1(上上)~9(下下)の9段階、品位等級は1上~3下(近畿農政局兵庫農政事務所調べ)。

2) 生育中の障害は立毛観察による0~5の6段階評価。比較比率は同年産の日本晴の玄米収量に対する比率。

3) 食味は、ヒノヒカリを基準とした官能調査の総合評価で、-2(まずい)~2(うまい)を示す。